王興之墓誌銘（おうこうしぼしめい）

永和四年（348）
（東晋時代）

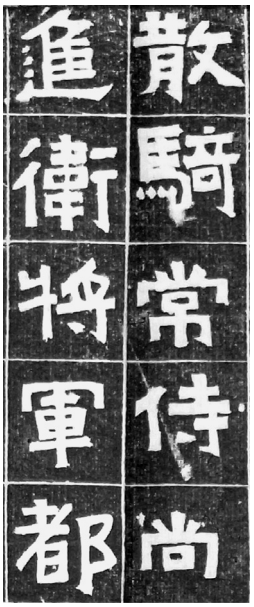
歴代墓誌銘にみる書法の変遷④

木雞室
伊藤　滋

405年

曩寶子碑

340年



王興之墓誌

325年

張鎮墓誌

図③

1960年代の中国において、「蘭亭序真偽論争」が報道され、政治的な一面も加わり大きな話題になりました。この蘭亭序（図⑤）偽作説の根拠となったのが、当時発見された「王興之墓誌銘」を中心とする一連の墓誌銘群であります。今回紹介する「王興之墓誌銘」は、その中心となるものです。この論争で大きく取り上げられ、有名になりました。しかし書法面では、前号で紹介した「張鎮墓誌銘」また「曩寶子碑」など前後の時代の碑刻と比較すると、ある程度毛筆の筆勢が見られるが、刻者の技倆が低いのか、また本来書かれた書が稚拙なのか不明だが、相当に劣る。（図④）

図④

楷書のようでもあり、隷書のようでもある。左右に太く押し出す筆勢などもぎこちない。（図⑤）左頁の表裏面の全体図版は縮小した。しかし近代に発見された碑刻資料として重要であるので紹介した。

次号は南朝・宋時代の「劉懐民墓誌銘」です。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りただければ幸いです。

伊藤　滋　メールアドレス
mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

353年

図⑤

図版①　王興之墓誌・表

君諱興之字稚陋瑯琊臨
沂都鄉南仁里征西大將
軍行參軍顧令春秋廿一
咸康六年十月十八日卒
以七年七月廿六日葬于
丹楊建康之白石於先考
散騎常侍尚書左僕射持
節衛將軍都亭肅侯墓之
左故刻石為識臧之於墓
長子閎之　女字稚容
次子嗣之　出養第二伯
次子咸之
次子預之

図版②　王興之墓誌・裏

命婦西河果休都鄉吉遷
里宋氏名和之字素贏春
秋廿五永和四年十月三
日卒以其月廿二日合葬
於君柩之右
父括字世儁使持節散騎
常侍都督秦梁二州諸軍
事冠軍將軍梁州刺史野
王公
弟延之字興祖襲封野王
公

「縦約28㎝、横37㎝」　縮小

書道芸術院
平成の群像（2011）

下谷洋子

10月の個展〝沈潜と流れ〟より
倣書的作品「とこしへに」（懐素　自叙帖による）

「書する心」

まだずーっと若い頃、ヴァイオリンの弦の響きに惹かれ憧れた。ベートーヴェンのヴァイオリンコンチェルトが好きで、あの弾力のある緩急、深く撓やかでビロードのように艶めいた世界、それこそかなに欲しい繊細な特質のいくつもがその弦の響きの中にはあるように思えた。いつも聴きながら書作をした。

今は、何もなく静まった部屋で書く。自分の動かす筆と紙の摩擦音を聞きながら、魂をうずめるようなつもりで……。

紙や筆の種類によってその音は変わり、それに合わせて自分のリズムも変わっていく。その心のリズムがある程度納得いくものになったとき、一つの作品が出来る。そうしてそのリズムとの巡り会いは、たった一度だけ、二度と同じものは生まれない。

もっと大胆に、奔放でもいいのかも知れない。ただ今の私は、自分の心音でかなのリズムを緻密に奏でることに関心がある。

〝書する心〟、一本一本の線に全身で寄り添い、耳を済ませて自分の音色を探したい。

少しゆとりが出て来ると人は類型化した作品を創る。私も例にもれず、いつもと同じテンポ、しみ込んだ字形、そこで、身につけたものを敢えてチョット壊してみる。安定路線をいくのではなく、無防備の状態に戻し、また前に進む。そんな姿勢の中で生まれたのが、十月の個展を開いた時の倣書的作品だ。足し算で積み上げるのではなく、足して引いて、その繰り返しで種々の要素が複雑にからめば、何か表れるのではないかと期待しながら。これは、早くに師から離れた私の学書法の一つでもある。

新たな視点で古典や古筆の美を感知し、特徴を捉えながら試作品に当たるのは実に楽しい。自分の感性を大事にどんどん書いていくと、予期せぬ方向に書が動き発展していくこともある。

これからどうなっていくのか、行先は分からないが、〝書する心〟から生まれる書が、時間をかけて昇華し、ジャンルを超えて書としての存在感を示すことを願って、柔らかな緊張感を持ち続けていきたい。

春頌

辛卯の年を迎えて

明けましておめでとうございます。
昨年は世情慌ただしい、混乱の相を呈していた寅年でした。
猛虎の年から跳躍の年へ、新しき年を迎え、皆様にとりより良い一年でありますようお祈りします。
本年は都美改修による影響などで、なにかとご不便をおかけしますが、ご支援、ご協力くださるようお願い申し上げます。

平成二三年元旦

財団法人書道芸術院理事長　辻元大雲
役員一同

書のひろば

理事長　辻元大雲

第64回書道芸術院展審査終わる

都美改修に伴い一般公募から審査会員まですべて年内に、また未表装での鑑別・審査となり例年になく搬入から審査など扱い量が倍以上で大変であったが、各部署担当者のご努力で無事予定通り終了することができた。感謝！

＊主な入賞者

・審査会員に対する賞

峰雲賞　現詩部　尾形澄神　（宮城）

・審査会員候補に対する賞

大　賞　漢字部　上田多恵子（大阪）

準大賞　漢字部　松村秀扇（千葉）

かな部　岡部照芳（埼玉）

現詩部　加藤紫翠（宮城）

現詩部　新宮文葉（京都）

前衛部　藤原紅雲（宮城）

（以下略、詳細後日発表）

＊展示日程・会場

・中央会場　2／1～6　東京セントラル財団役員、常任総務、峰雲賞・同候補A、大賞、準大賞、白雪紅梅賞、院賞、毎日新聞社賞、準特選を陳列する。

・作品研究会・表彰式・祝賀会

2／5（土）13：30～　帝国ホテル

祝賀会参加申し込みお忘れなく。

・西日本会場　2／23～27　奈良県文化会館、懇親会　2／26　日航ホテル

財団役員、峰雲賞、大賞、準大賞、白雪紅梅賞のほか甲信越・北陸以西の総局、支局関係作品を陳列する。

・東日本会場　4／1～6　仙台メディアテーク　懇親会　4／3　展覧会場

財団役員、峰雲賞、大賞、準大賞、白雪紅梅賞のほか東京・南北関東以東の総局支局関係作品を陳列する。

審査総会

第63回毎日書道展主要人事

このほど開催された毎日書道会理事・評議員会にて、第63回毎日書道展の主要役員、昇格人事などが決まった。来年2月初旬開催の運営委員会で会員賞選考委員、当番審査員などが決まる予定である。

＊主要役員（院関係者中心）

・63回展実行委員長　關　正人

・総務部長　田岡正堂

・審査部長　辻元大雲

・東京展陳列部長　片岡重和

・中国展実行委員長　小竹石雲ほか

・運営委員　近詩部　砂本杏花

同　大字部　大野祥雲

同　前衛部　板垣洞仙

＊昇格人事

・参与会員推挙　大字部　泉　雪華

同　刻字部　小山鳳来

・審査会員（規定昇格）

近代詩　大隅晃弘

同（特別選考）漢字部　加瀬澄春

かな部　平川峰子

近詩部　山田梓江

大字部　水野春翠

刻字部　佐藤香山

前衛部　石田和子

・会員（規定昇格）

漢字部　大越墨扇、鏑木梅道

木村貴衣、島田白露

かな部　庄司紅邨、前田まさ美、山下　薫

近詩部　末岡紅樹、中島翠皐

大字部　佳波琴窓

前衛部　佐々木祐子、西岡悦子

・会員（特別選考）

かな部　須田清子

近詩部　大西春雪、小沢華仙

大字部　有野琤扇、黒田紘世

前衛部　今野白峰

・会友（略）

主な開催内容、日程

昨年に続き国立新美術館のみでの開催となり、作品規格、鑑別・審査などは基本的に62回展を踏襲する。

特別展として生誕100年記念「宇野雪村の美」を国立新美術館1棟を使用して開催する。

・2／2・3　運営委員会

・4／14　事務局合同会議ほか

・5／9～11　会友公募作品出品票受付

・5／20～22　鑑別

・6／14　役員出品票締切

・6／20・21　役員作品搬入

・6／24～26　入賞審査

・6／29　会員賞選考

・6／30　文部科学大臣賞選考

・7／6～31　国立美術館会期（1～4期）

前期（漢字・大字・篆刻・刻字）

後期（かな・近代詩・前衛）

・7／12　表彰式・祝賀会（ザ・プリンスタワー東京）

・巡回展8／3より関西展ほか開催

21世紀の書
―私の主張―

漢字 (四)

名越蒼竹

合理性と叙情性

前回は書の近代化について触れた。西洋では近代化と合理化は一如である。また歴史主義の立場からも不合理は野蛮であり、合理は文明の証とされてきた。確かに不合理からは納得や合意は得られないかもしれない。

しかし、人間には感情がある。分かっていながらその通りにはできない事例は山ほどある。義理と人情のはざまで苦しむ姿は日本人ならば共感できる人は多いに違いない。それも人間の現実であろう。芸術が優れて人間的な営みであるならば、理にも情にも徹しきれない不安定な人間をそのまま認めない限り、芸術は成り立たないと思われる。

従って主義主張を全面に押し立てていくことは、党派性を強めこそすれ他者理解を深めることにはつながりにくいと思われる。虚心に味わうことや共感することといった情の部分を軽視してしまう恐れもあるのではないか。

書において理は技術でもある。これも重要な要素であり、私たちは常にこれを磨き続けなければならない。しかし技術を超えてやむにやまれず表出された味わい（例えば即興性）にも目を向けたいものである。叙情がなければ芸術として成り立たない。

名越蒼竹書

第五十五回記念書道芸術院展出品

前衛書 (四)

工藤永翠

前衛書を書き始めてから、「書の線」をそれまで以上に意識するようになった。自分で書く時は勿論のこと、多くの作品を鑑賞する時も然りである。用具によって多彩な線を表現することはできると思うが、そのためにはやはり、日々の鍛錬と柔軟な心が必要だ。私はあくまでも、書の線は皆共通していて、これは前衛の線だとか、近代詩の線だとか区別をすること自体ナンセンスなことと思う。

この10年程、私の作品は長々鋒の筆を用いた作風を続けている。どうしても同じ筆で書くと線質、構成等が同類作品になってしまう。やはり、常に新しいものに挑戦していかなければと思う。過去の作風に執着せずに取り組めば、さらに違う世界を見出すということにも繋がっていくだろうし、自分の部門以外も勉強し理解することで新たな発見があり、自身の作風も、より幅が広がる。

「書線」・・滲みもかすれも、生きている線を書ける日が来るだろうか？まだまだ当分来そうにないかもしれないが・・ただひたすらに書くしかないのだ。

工藤永翠書

みちのく書人達展　宮澤賢治詩より

書話シリーズ 392

『書とダンスとコラボ』

中川紅蘭
（かな部・審査会員）

母の薦めで、平成3年より加藤紅樹先生に、仮名をお習いしてから17年という月日が経ってしまいました。先生は、乙女のようなロマンチックな面を持つ反面、男性的な度量の広さをお持ちになり、永井幸子先生亡き後、高橋松延先生の御指導をいたゞく機会も作ってくださいました。中央への道を開いてくださった加藤紅樹先生のお蔭で、水茎会全体の士気が高まったことは、言うまでもありません。また、先生の書に対する姿勢や、生き方そのものが、私の人生に大きな影響力を与えてくださったことも事実で、出会えたことに感謝の気持ちで一杯です。仮名を勉強して、数年経った頃でしょうか、ダンスの競技に出ている私に、「〝二兎を追うもの一兎も追えず〟という諺がありますから、書一本に絞るほうが良いと思いますよ。」とご忠告を受けたことがありました。ところが私は、「二兎どころか、三兎も四兎も追ってみせます!!」と、ヤンチャ（?!）な発言をしたものでした。何という恐いもの知らず!! 買い被り!! 今思い出すと本当に恥ずかしく、冷や汗が出ます。実際その当時も現在も会社の経理、管理薬剤師、書道、ダンスと、四つのことを何とかこなしているのですが、近頃は、心身ともに少々疲労気味で、調整の必要性を感じております。書とダンス、静と動の正反対のものと、捕えられがちですが、実は、共通点が沢山あることに気づいたのです。視点を変えると今まで見えなかったものが、ダンスを通じて発見できたのも事実で、お互いに投影し合い融合し合えるのではないかと考えた時、より楽しく、魅力的なものに思えてきたのです。次に私なりに感じた共通点や、発見点を述べて見ようと思います。一、書では余白の美を大切にする―ダンスはフロアという空間を紙面ととらへ、如何に演じるか。一、線の肥痩と潤渇の変化―拡がりとコンパクト、強弱、高低の変化をつけて踊る。一、リズムの変化、連綿での疎密の変化―遅くゆったりと、速くシャープに、決められたリズムの中でも長く延ばしたり、短くしたりと変化をつけて踊る。一、渇筆の部分は、ゆったりと紙面をなぞるように、筆から出る墨量の変化をつけながら―天使の羽のように軽く柔かに、床に対しては、キスするような優しいタッチで。一、力まないで書く（前述同様、私にはとても難易度が高い）―ボディコンタクトの部分は、マシュマロのように柔く、男性と組む手、肩に置く手は、ふわっと、羽毛のように軽く（バランスが少しでも崩れると相手に負担がかかり、重いと感じさせる。）一、字を締めて書く―CBM（ボディーの絞り）をかけて踊る。一、歌を書く前に、その作者の心情や、詩に対する自分の感性や表現を大切にする―踊る曲に、自分の感情をこめて、観客にアピールする。最後に、私のリーダーである夫が提案してくれたものを述べます。（正しいかどうかは、保証の限りにあらず。）一、最近のダンスの踊り方で、肩甲骨（けんこうこつ）（または背骨）を意識して踊ると、よりダイナミックに、美しく表現できることから、書道も、手首、腕だけの動きでなく、肩甲骨を意識することにより、反動動作も出て、それを活かすのも面白いのではないか？まだまだこれからも、ワクワクするような（?）または見当違いの発見が続くことでしょう。最近のフィギュアスケートを観ていても、技術点だけでなく、表現力、芸術性がより重視されてきていますが、観客からのスタンディング・オベーションを得られるような感激を、書やダンスで一度でも味わえたら…と願うのは、夢のまた夢であることは、間違いありません。とにかく凡人である私は、書とダンスという異種のものを通して、互いに高めあい進化していけたらと願うばかりです。

中川紅蘭 書

第59回書道芸術院展　準大賞受賞作

書話シリーズ 393

「花のやうに」

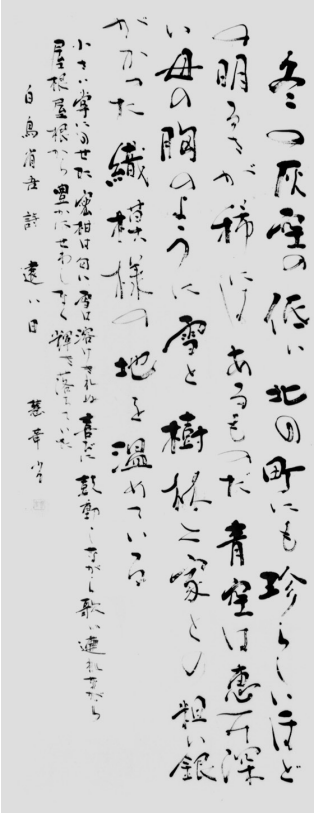
前田鉄之助詩

権代慧華
（現代詩文書部・審査会員）

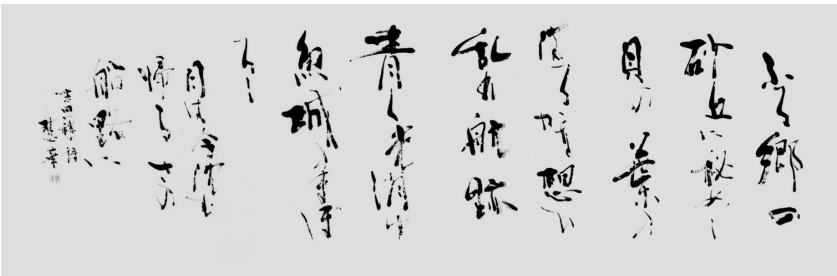
今は亡き恩師山田魯江先生と先輩の配慮に導かれ、仙台空港に降り立ったのは、1981年の1月吉日であった。

大沢雅休曽祖師と、板画家、棟方志功師との二大巨匠展の勉学参観の爲であった。曽師加藤翠柳先生の飽くなき探究と、一門の徒への深くも熱い傳達が爲の、愛情の発露からの行事であったのである。同年の師範、準師への昇格試験の数種中の一つである理論試験に〝巨匠展を観賞し感銘作を2点選び感想文を提出せよ〟との一問題があったのである。書学せんとする者の精神も理解する事も出来ない情けなさを痛感したが同年秋の試験通過後早や三十数星霜の道程を辿った今、果して自分は芸術する書作の萬分の一にも近づけず浅薄な形骸のみの世界に漂っているのではないのかと反省する時恐怖と侘しさに苛まれる。巨匠の説に半眼内視の思想がある。旺盛的確に見ぬきそれに等しい写実力表現力が必要である。対象の再現が目的ではなく外なる物を媒介としてより内なる深き真実を明瞭に視ることだと教示してくださる。深度速度角度筆触は大切な書美の要素であり、余白は未発表の潜在的な存在として書を成立している。文字が引き連れている印象は余白の異りから生じる。

書作行動とは天地が生じ自分一人で祈る気持で書くのである。刻る様に深く滔々と流れる大河の美学である。淀みなくさらさらと流れる小川の美学を基礎として、歴史の堆積が沈黙している。書の歴史の堆積は重く深い。構成、筆触、角度の美は、深く黙する余白を作り、旋律拍子も生れ、書のドラマが展開する。沈黙、あるいは天から地へと向う重力が働いている。歴史の堆積が重力として働いている。書は余白に支へられて成立する。余白に依って印象が異なってくる。強くも穏かにも感じてくる。書を書くことは、白紙にどの様な余白を作るかという事を常に従へていることだと思える。深く重い書の歴史を自戒祈念の想いで掘ろうとしても、私の前で崩れ、嘲り遠ざかってしまう。その空しい境いを幽遠な空白、余白に創成させる事の出来る、強い感覚、感性を培って行くことが今、弱気になっている自分に課せられた課題である。古典に憧れる強さと、新しい近代的感覚に基く、價値創造に燃える強さが、同時に働くというような場合にこそ、吾々の成長を促し得る事が出来るのではないかと思う。伝統精神に生き、その理想に生きて、常に現代の書の先端に向かう表現への関心を失はないように、先達諸師の幽遠にも深く、心象鮮かにも暖かく満ちあふれる感受力で精意、機微に伏し学び得たいと思う。その上で新しい抒情を完成させるという、芸術的、文化的活動の遂行の一端でも担う事が出来れば、今の自分に課す事の出来る唯一の精進のあり方だと思う。



第39回書道芸術院展　毎日新聞社賞　　権代慧華 書



第54回毎日書道展　毎日賞受賞作　　権代慧華 書

書道芸術院創立記念日
特別公開講演会

平成22年11月23日（火・祝）
於　上野精養軒

「言葉と出会う　俳句と出会う」

講師　　片山由美子先生

〈公開講演会〉

理事長　辻元大雲

銀杏の鮮やかな黄葉、紅葉の紅色の冴え始めた上野の山に、書道芸術院創立記念日を寿ぎ参集した二百余名の聴衆が、精養軒二階のホールを埋め尽くした11月23日午後2時、俳人の片山由美子先生をお招きしての恒例の講演会は、深秋の候にふさわしく爽やかで、また小春日和の暖かさを感じさせてくれた。

片山由美子さんとは私が千葉県立木更津高校へ赴任した昭和48年、音楽の教育実習生として2週間程であったが芸術科として教科指導の手伝いをさせていただいてからのお付き合いである。といっても当時のことはあまりよく覚えていない。後年近代詩文書作家協会（現日本詩文書作家協会）の企画展「現代の俳句と書の世界」を開催する準備に事務局として俳人協会等と種々打ち合わせをする中で久方ぶりの再会となり、それ以来公私共にご交誼をいただいている。今回の講演依頼も二つ返事でお引き受けいただき、誠に感謝に堪えない。

「言葉と出会う　俳句と出会う」と題された講演は、当日配布された資料をもとに文字を手で書くこと、声を出して読むことの意味、意義、文字に霊が宿るとは、万葉仮名から更にかな文字への変化から、日本語の美しさをもっと感じとることの大切さなどを訴える。英語では平凡な意味を伝えるだけに終わってしまうことが、微妙なニュアンスの違いを日本語は味わわせてくれる。ひらがなのみの短歌や俳句の柔らかな響き、逆に漢字を多用した句の力強い響きなど、文字の持つ不思議な力を感じないわけにはいかない。更に季語の持つ奥深さや広がりは、俳句という短詩形であるからこそ発揮できる、等々具体例を挙げながら分かりやすく噛み砕いてお話しいただいた。

最後に上田三四二氏の著書「短歌一生」（講談社学芸文庫）より引用、短歌や俳句は日本語の「底荷」となるべきもので、決して帆やマストを目指すべきではないとの主張を紹介された。「底荷」とは船底に常に位置し、航行のバランスを取る役目を果たし、外からは目立たぬ陰の力持ちの存在である。短歌・俳句は日本語の底荷となれとは極めて重い意味を持つ。華美を競わず、栄誉も求めない。しかし、しっかり美しい日本語のバランスを取り、正しい方向をめざす力を発揮するべきだと訴える。

翻って我々の書の世界ではどうであろうか。日本そして東洋の素晴らしい文字文化から発展してきた書、伝統を踏まえ更に新しい時代に生きる書を目指す時、この「底荷となれ」の精神は

辻元理事長あいさつ

片山由美子先生講義

肝に銘じておかなければならないのではないか。

2時間にならんとする講演会のあと、先生監修の著書「色の一句」をご紹介いただき、サイン会までサービスをいただき感謝。三階へ会場を移しての創立記念日懇親会は院のお誕生会となり、和気藹々とにぎやかに行われた。院役員は午前中理事会・評議員会をこなしていただき、院事業につきご検討いただいた。充実、多忙の一日であった。

〈懇親会〉

千葉蒼玄

今年は、俳人の片山由美子先生の講演で、書には欠かせない言葉についてのお話で、俳句の面白さと醍醐味を学んだ後、恒例の懇親会となった。

懇親会は、辻元大雲理事長の挨拶に始まり、小伏竹村先生の乾杯。そして、片山由美子先生著書「色の一句」を購入された方々には、片山先生が自筆でサインをしてくださることになり、サインをもとめる人たちで大勢の列ができた。

とても賑やかな雰囲気のなか、各総局支局長より来年の行事予定、及び展覧会等のご案内が紹介された。来年の単位認定講習会は富山で開催されるため、津田和秋先生より是非参加していただきたいとの熱いご案内があった。また、浜谷芳仙先生の地域文化功労表彰受賞（文部科学大臣表彰）のおめでたいご紹介もあった。

新年早々には開催の毎日現代の書・新春展も開催され、書道芸術院からの出品者が紹介された。

片山由美子先生サイン会

〈片山由美子先生著書〉

小伏竹村名誉顧問より乾杯のご発声!!

会場風景

第64回書道芸術院展をまじかに控え、和やかで充実した懇親会は、時間の流れが速く感じられる。次への新しい一歩、そして更に書に対する意欲を深めていくためにも、書道芸術院の仲間同士が団結していくことの大切さを祈念し閉会となった。

（昨年の講演会後の報告記事の為、一部そのままで掲載してあります。）

片山由美子先生 プロフィール

一九五二年千葉県生まれ。一九七九年、鷹羽狩行に師事し俳句を始める。翌年「狩」入会。一九九〇年に第五回俳句研究賞受賞。句集『水精』『天弓』『風待月』ほか。評論集『現代俳句との対話』（俳人協会評論新人賞受賞）『定本 現代俳句女流百人』『俳句を読むということ』（俳人協会評論賞受賞）、対談集『俳句の生まれる場所』、エッセイ集『鳥のように 風のように』などがある。「狩」同人。（社）俳人協会理事。（社）日本文藝家協会会員。青山学院女子短大国文科非常勤講師。

308

漢字研究部　曹全碑（漢）①

用紙　半紙普通判
左の法帖の中から何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

特別研究部臨書課題＝（全紙以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

〈解説〉
陝西省郃陽（ごう）県から出土したこの碑は、隷書最盛期の最後を飾る代表的八分隷である。
結体は厳整でゆるぎなく、筆致秀麗でのびやかな破磔（はたく）を見せ、礼器碑とともに漢隷の典型といえる名品である。特にその流麗な書法は、八分を持つ木簡隷との共通点が多い。現在は、陝西省の西安碑林（陝西省博物館）にある。

重レ親　致レ歡　曹　景
完。易　世　載レ德。不レ
隕二其　名。及二其　從レ（政。）

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
（押印のみも可）

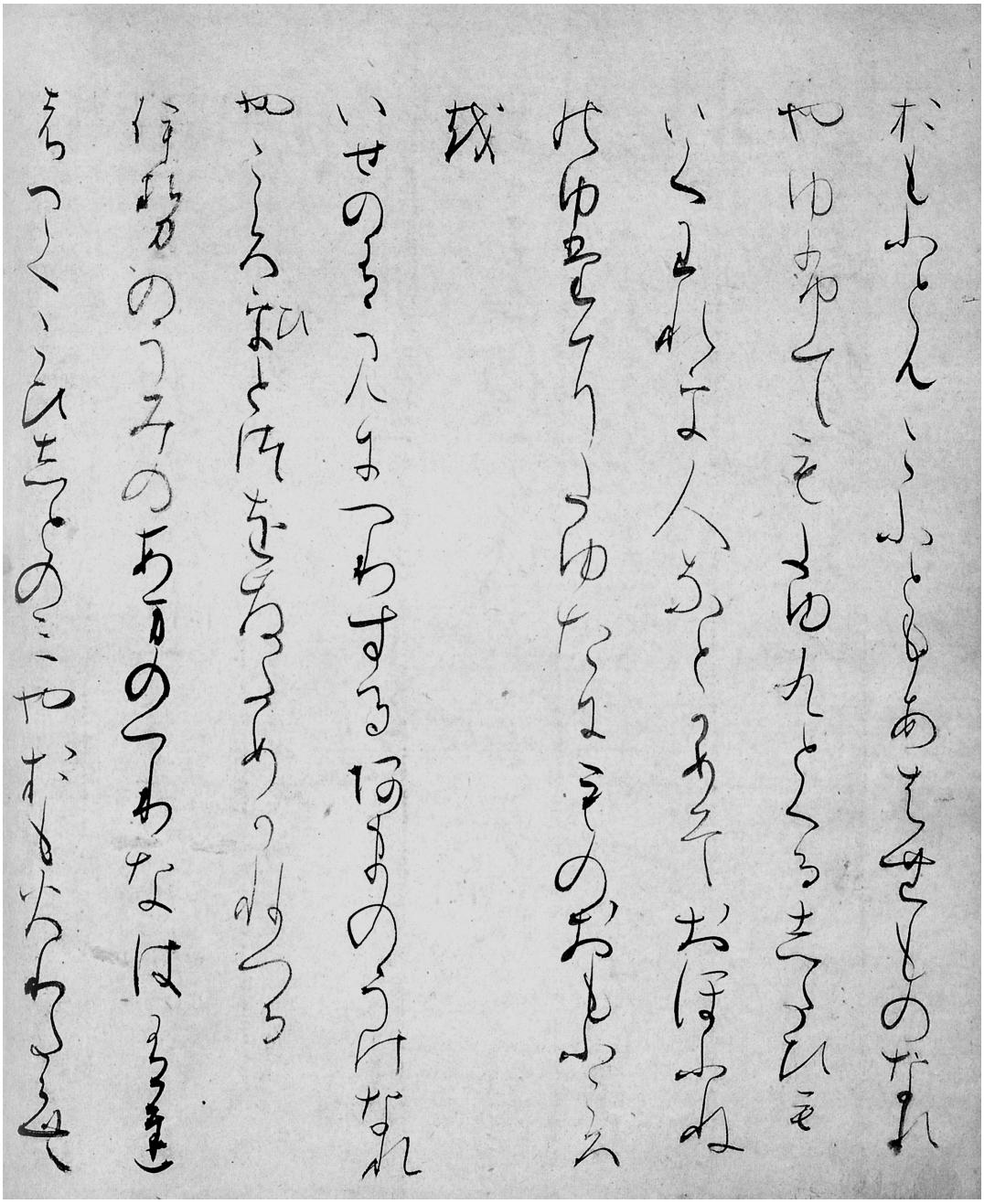
（93%縮小）

㉜ かな研究部　関戸本古今集（伝 藤原行成筆）①

特別研究部臨書課題＝（全紙以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

用紙　半紙普通判（料紙可）

＝注＝　かな研究部競書作品は、上の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）



〈よみ〉

おもふともこふともあはむものなれ
やゆふてもたゆくとくるしたひも
いでわれを人なとがめそおほふね
のゆたにたゆたにものおもふころ
を

いせのうみにつりするあまのうけなれ
やこゝろをとつをさだめかねつる
伊勢のうみのあまのつりなはうち
はへてこひしとのみやおもひわたらむ

〈解説〉

名古屋の素封家関戸家が所蔵していた、古今和歌集の書写本（零本＝半端の本）27枚を、関戸家の名に因んで「関戸本古今集」と呼んでいる。

もとは、上下2冊の綴葉装の冊子本で、現存の歌数は約230首、料紙は鳥の子の染紙で、原装は、白、紫、藍、茶、黄、緑など各色とも濃淡二色を重ねる。

筆者を藤原行成と伝えるが確証はなく、書風や料紙の趣向から推して高野切よりやや遅く、11世紀半ばすぎと推定されている。

漢字規定　初段以上【二月十五日締めきり】用紙　半紙普通判

最首翠風選書

萬物生光輝　よみ（万物光輝を生ず）

書体＝自由

習い方解説（四）

最首翠風

萬物生光輝
（春になって万物が生き生きとして来た）

新年にふさわしい語句を選びました。今回は用紙の選択に留意しています。行草体の方は流れを表現し易いように薄手の単宣を、隷書の方は沈着さを強調する為三層の雅宣紙をカットしています。月例作品を拝見しますと「お気に入りの紙」で十年一日の如く書作している方が殆どです。用紙によって線が強くなったり、潤渇が表現されて作品に立体感が生まれたりするのです。勿論「どう表現するか」が創作のスタートであることは言う迄もありません。

漢字規定 秀級以下【二月十五日締めきり】用紙 半紙普通判

小林琴水選書

竹聲松影 よみ（竹声松影）

書体＝楷書

習い方解説 (四)

小林琴水

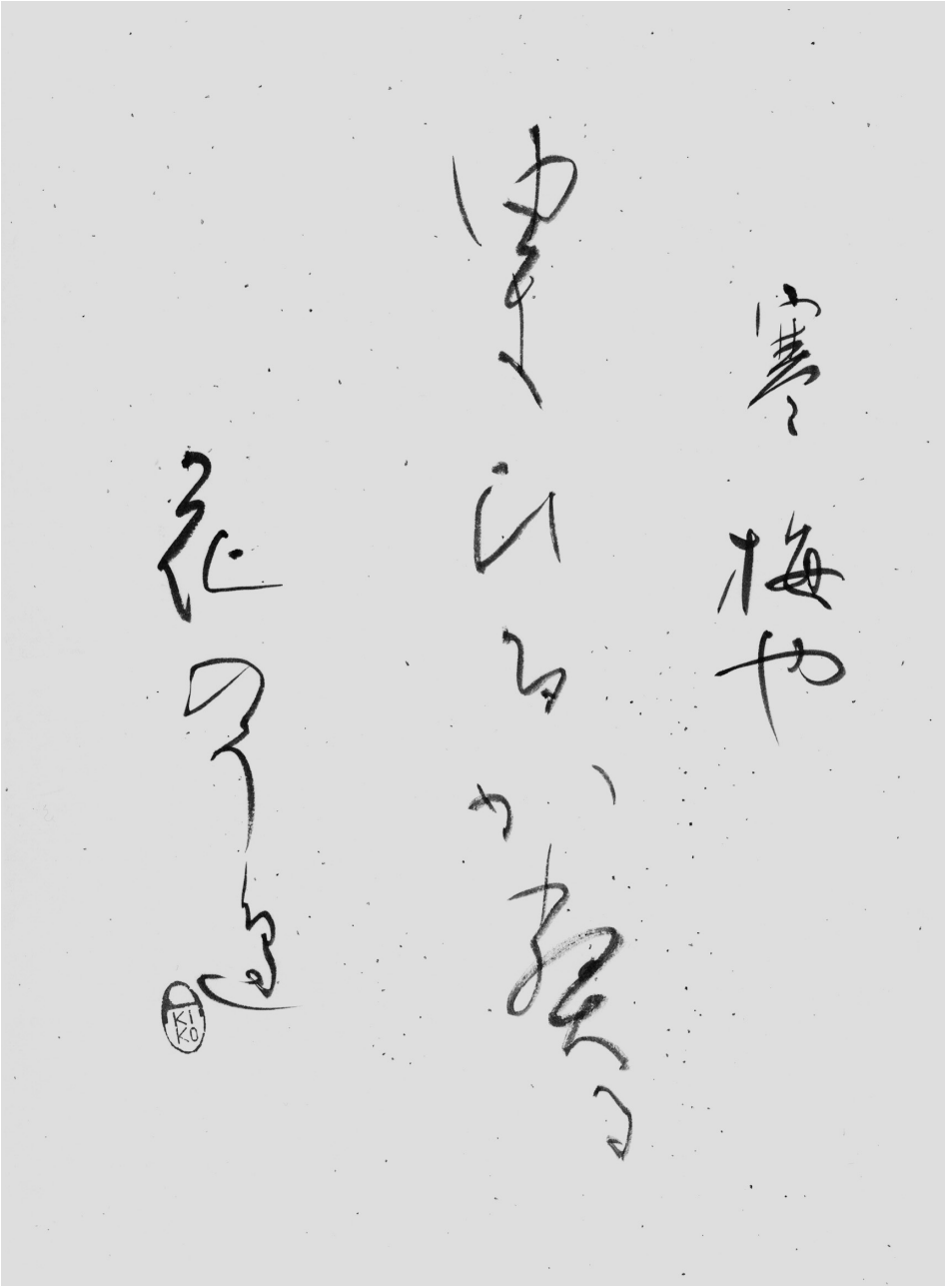
竹聲松影
（風が吹いて竹が響き月が照り松に影ができる）

左はらいの多い字形です。注意しましょう。筆まかせに筆を紙からはなさないように、ゆっくり筆を持っていくように吊りあげて下さい。

スッキリと整正された字形を…勢いではらって、針の様な線が出ないように注意して下さい。

かな規定　初段以上【二月十五日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）

石井明子選書



よみ方　寒梅やゆ(由)き(支)ひるが(か)へ(弊)る花のうへ(辺)

創作

習い方解説（四）

石井明子

寒梅や雪ひるがへる花のうへ
（大島蓼太）

●繊細さと大胆さと

過日、『円山応挙―空間の創造―』展を見る機会を得ました。多くの襖絵は実に大胆な構成で、タッチは細やかに描かれていました。更に私が引かれたのは、『淀川両岸図巻』でした。絹本着色の一巻は拡大鏡を要する程に細密で美しいものでした。どんな芸術もこの二つの要素が不可欠ということでしょう。繊細は軟弱に、大胆は粗雑に流れ易いものです。それでも制作の目標に置きたいものです。

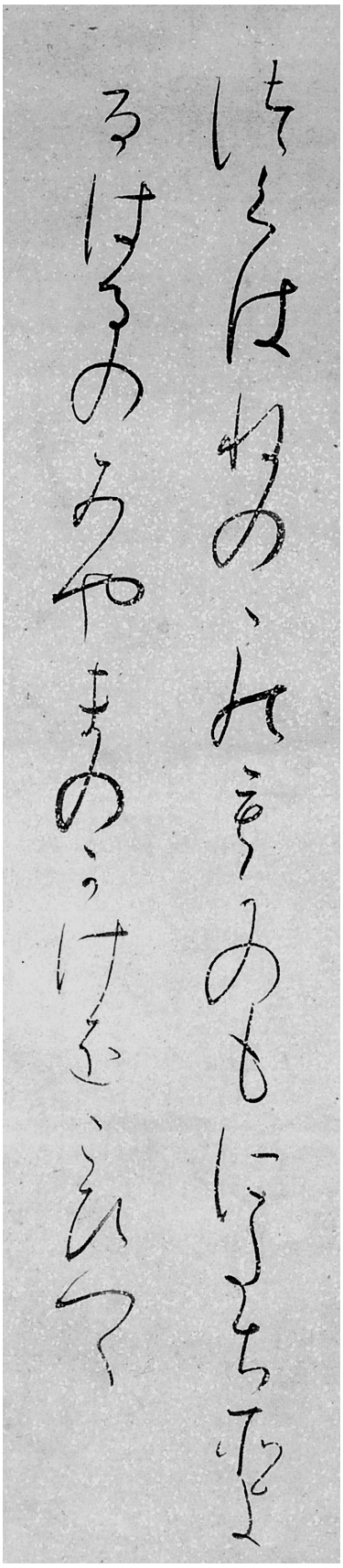
大島蓼太（一七一八―八七）のこの句に動かされ、広がりのある表現をねらいました。目標は明確でも人に伝わる結果までは困難でした。

字の置きかえは自由です。仮名遣いを間違えないように！

いたち毛の頽筆を使用。

かな規定　秀級以下　【二月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。



高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　つ(徒)く(久)ばねのこの(能)も(毛)か(可)のもにた(多)ちぞ(所)よるはるのみやまのか(可)げをこひつゝ

かな条幅規定　【二月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

木村東舟選書

よみ方　白梅(しらうめ)のは(者)な(那)あか(可)る(流)く(久)て古池(ふるいけ)に(耳)
ゆ(遊)るゝ光(ひか)りのけ(介)は(八)ひ(日)こそ(所)すれ(連)

創作

習い方解説 (一)

木村東舟

白梅(しらうめ)の花(はな)明(あか)るくて古池(ふるいけ)に
揺(ゆ)るる光(ひか)りのけはひこそすれ
（島木赤彦）

春を待ち望んで感じ取ることの出来る、日の光りの様子を歌っています。
条幅作品定番の二行書きです。書き出しは少し小さめに、リズムを持ちつゝ書き進めます。文字が大きくなり過ぎず、左右の行がうまく呼応するよう、行間・字間の取り方、墨量等考慮し、独自の作品に仕上げて下さい。

※たて形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【二月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

西林乗宣選書

皇帝避暑乎九成之宮此則随之仁壽宮也
（皇帝暑さを九成の宮に避く　此れ則ち随の仁寿宮なり）

書体＝自由

596号（12月号）一部訂正　㊟＝先書㊟具示　㊟が脱字でした。
月例提出作品はどちらも可。

漢字条幅規定　秀級以下【二月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

辻元大雲選書

黄菊香殘夜雨　烏紗醉落秋風
（黄菊に香残りて夜雨、烏紗醉落す秋風）

（秋興）

書体＝自由

習い方解説 (四)

西林乗宣

九成宮を行書でというのは例がないと思う。その行書もちろん古典を下敷きにしています。今回は「智永の真草千字文」その真を少しくずし気味にやってみました。マス目は折ってもよし、折らなくてもよし。気侭に書いて下さい。落款は作品の決めどころ、位置、大きさ、くずし方そして太さの四つの条件を満たして下さい。

習い方解説 (四)

辻元大雲

これから三回半折二行書きの練習です。今回は12字句です。一行目に七文字、二行目五文字でバランスをとります。行書ですが単体で、おだやかな表現としました。工夫して連綿を入れたり、もっと大小をつけて変化させてもよいと思います。「残」、「酔」など字形を調べて表情に変化を与えてみてはいかが。

ペン字規定【二月十五日締めきり】

牧泰濤選書

書き初め。新年になって初めて書
や絵を書くこと。主としてめでたい
詩句を選び、ふつうは正月二日に
行う。筆始、吉書ともいう。
書き初めやうるしの如き大硯
久女句

泰濤かく

用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、**黒インク**使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (四)

牧泰濤

霞立つ長き春日を子供らと
手まりつきつゝ今日もくらしつ

良寛の歌である。明けましておめでとうございます。お互い、いい新年でありたいものです。今どき「手まりついて遊ぶ子どもがいるのかな?。手足を使わないから、手指の巧緻性ができない。いや、パソコン、ゲーム機、ケイタイを駆使しているから大丈夫だと?規格一定の動きでは脳の活性化にはならない。その点、ペンや筆や刻字、篆刻の刀を使うことは一番の方法と思ってこの道を推進したいものです。

無一文で托鉢に生き、村の子供たちを友とし、高潔な人格を慕われた良寛にはなれなくとも、近かづく気持ちだけは持って、院や書道界のために学習や仕事をしたいものです。

新年から向かう三ヶ月行書体で書きます。

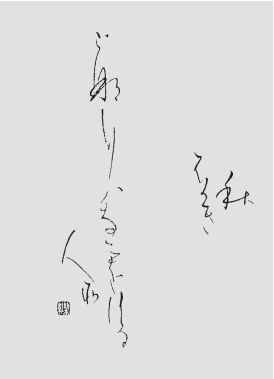
※**落款**を必ず入れる。
（**自分の名前**を入れること。）

今月のホープ作品各部総評 NO.595

かな部　師範　小野　梨紅

稚拙な部分も目につくが、大胆な構成を力強い線で表現した力量は見事。明るく斬新さが魅力です。

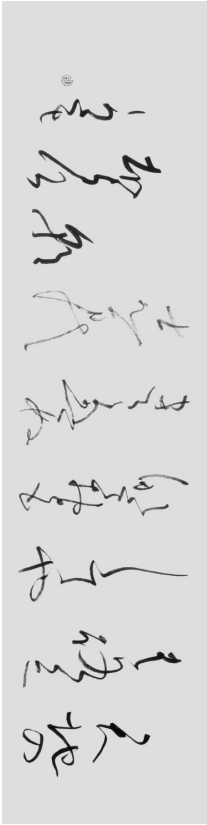
◎かな部総評　一部、字が小さく貧弱な作もあるが、構成に工夫の跡が見られ好もしい。かな用紙でも、大字用は不可です。（明子評）



かな条幅部　五段　北原　佳玉

締まった線でよく動き、浮いて軽くなりがちな渇筆が特に白眉。基本を把握しての躍動で頼もしい。

◎かな条幅部総評　かな遣いきこえぬ、変体がな於・盈の誤字が散見。横書きはバランスが難しいが充分検討の上書くこと。（洋子評）



前衛書部　特選　鈴木　未緒

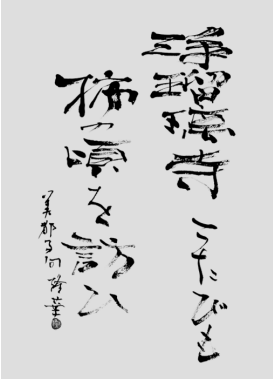
大胆な構成による空間（余白）の美を作り、すばらしいセンスと芸術性が感じられる作品である。

◎前衛書部総評　用具・墨色・線質の研究作多く感動したが、今後大胆な表現を期待する。（洞仙評）

現代詩文書部　特選　庄司　隆華

隷書や摩崖碑のような雄大でゆったりした表現。余白もよい。仮名に漢字のような立体感が欲しい。

◎現代詩文書部総評　構成のよい作品が多い。線質も気を配って欲しい。（鄭雲評）



漢字条幅部　師範　久木田直浩

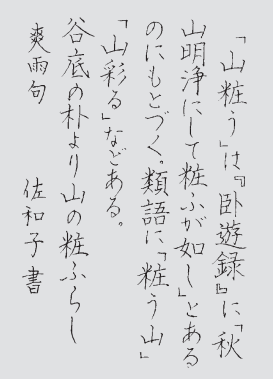
参考手本をもとに、墨量の工夫という自分なりの味付けをした点がよい。筆端にも心が届いている。

◎漢字条幅部総評　「各書体に挑戦を」との10月号解説が実行された感あり。下級は特に落款に配慮されたい。（翠風評）

ペン字部　師範　沖　佐和子

しっかりした楷書で一本一本の線の引き方もよい。名前まで統一された書き方で堂々とした趣だ。

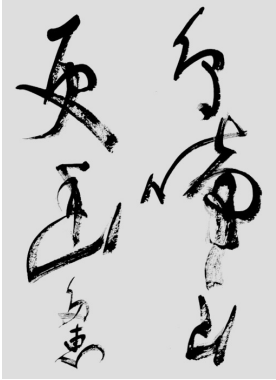
◎ペン字部総評　草書を多用している作品もあったが字形を字典でよく調べて用いることが大切である。（蒼玄評）



漢字部　師範　上田多恵子

軽妙なリズムで爽やかにまとまる。暢びやかな渇筆は運筆の呼吸を感じさせ明るい作である。

◎かな部総評　上級五文字表現多彩であったが線質の甘い深味のない作多し。下級楷書安定作多く好感が持てた。（大雲評）

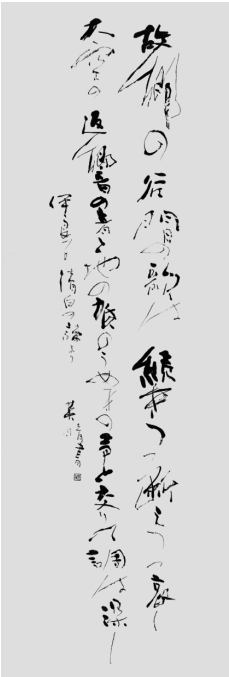


今月の

特別研究部優秀作品（特選）

現代詩文書　（安波）　鈴木英晴

「伊良子清白の詩」



鈴木英晴書

180×60㎝

◆濃墨で長々鋒を用い、左右の白と合わせて字間、行間の白が美しく映える。詩文の趣と調和して詩的。（洋子評）

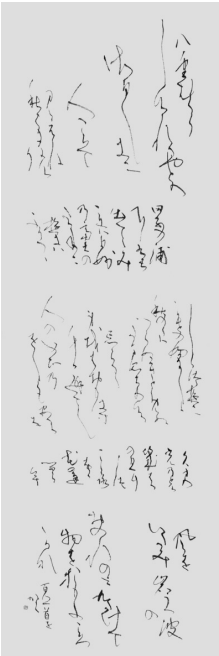
◆中央部に集約させた構成は、左右の余白と響き合って軽やかなリズムを奏でる。楽しい息づかいの作。（大雲評）

◆極細の線に響きがあり美しい。潤筆部分がそれを引き立てる相乗効果があり、余白も充分で明るい作。（萬城評）

◆大きな紙面を実に上手に使いこなしている。真中に表現される詩が浮き出るような使い方見事です。（倫子評）

かな　（卯月）　前田まさ美

「百人一首」



前田まさ美書

180×60㎝

◆百人一首を六首、大小の変化を交じえリズミカルに表現。歌を詠む楽しさが伝わってくる作。（大雲評）

◆構成を工夫し、寄合書きの趣きがあり、かな作品ならではの作風で楽しめる。細部まで気配りがある。（萬城評）

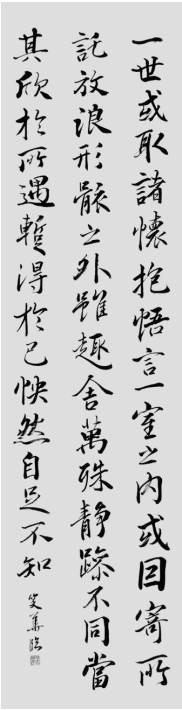
◆淀みない筆の動き、流れを美しく表現されている。欲をいうとも少し筆を太くして書くとどうかな。（倫子評）

◆構成に変化をもたせ、部分に応じて字の大小、疎密などにも配慮した工夫作。中央が少々貧弱で残念。（洋子評）

臨書　（千葉）

村田笑華

「蘭亭叙」



村田笑華臨

137×35㎝

◆原本を素直に鑑賞し、着実に再現しようとする臨書態度に好感が持てる。筆法、字形、構成共に自然。（萬城評）

◆息を整え最後まで一貫した動きは見事です。特に目を引いたのは横画の表現です筆使いやわらか。（倫子評）

◆臨書の模範のような姿勢に感服。原本を確実にとらえ表現できる力は見事。墨量も自然でよく整う。（洋子評）

◆張金界奴本の特徴をよく観察し、品よく自然なリズムで表現している。更に意欲的な取り組みを期待。（大雲評）

現代詩文書　（大雲）

阿部恵泉

「あかねの詩」

阿部恵泉書

175×55㎝

◆墨の使い方が実に巧み、墨をつけその墨のなくなった所でつけ足すのか、的を射た所でピッタリ。（倫子評）

◆紙の大きさに対する文字の大小、潤渇など全体に知的にまとめ、熟れたタッチで深さがしみ透る。（洋子評）

◆切れ味鋭く、リズミカルに書きおろす技巧は安定し、錬度の高い作。潤渇のバランスもよくまとまる。（大雲評）

◆漢字の字形は正当な王羲之風で、かなもよく調和し、自然で完成度の高い書。品格が高く知性的な作。（萬城評）

角田悠香書

60×180㎝

前衛書　（四谷）

角田悠香

「遠い記憶」

◆多彩な線を広い余白でシンプルにまとめ、視線が彼方に泳ぐようなロマン性を窺わせる。落款位置？（洋子評）

◆シンプルな動きから余白の響きを鮮明に感じさせる作。運筆のリズム方向性と落款の位置が？（大雲評）

◆余白を十分に取り、重心を上部に置いた構成と、線質の軽ろやかさが、作品に爽快感を生み出した。（萬城評）

◆楽しく筆に自分をまかせて表現した感は作品の流れを一貫としている。少し余分の線もある感じ。（倫子評）

漢　字　（華祥）

安藤華祥

「養其神」

安藤華祥書

178×55㎝

◆堂々とした大字表現へ挑戦する姿勢を買う。思い切った破筆、渇筆がスケールの大きさを見せる。（大雲評）

◆金文を素材に濃墨で気迫に溢れる作品。「神」字の渇線が作品全体を明るい表情に仕上げ成功した。（萬城評）

◆大きな動きは、私の心を動かしてくれる。筆だけでなく体全体を使って表現されたリズムを感じる。（倫子評）

◆骨気に満ちた流れの貫通が群を抜く。墨量に添った字形のバランス感覚も冴え、渇線が快活に響く。（洋子評）

総出品点数 78点

創作の部（50点）
漢字―8点
かな―6点
現代―20点
篆刻―1点
前衛―15点
臨書の部（28点）
漢字―25点
かな―3点

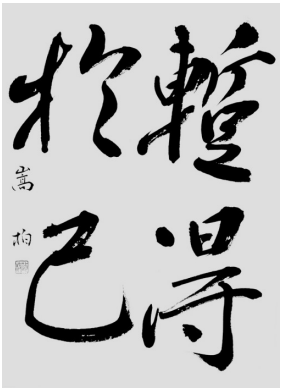
〈特選候補者〉

（創作）
漢字
もく　西川　藤象
英峰　佐藤　桂香
さつ　明石　麗子
京橋　藤原　小翠
書泉　田子　白嶺
卯月　新谷　嵐泉
現代
うる　今関　心華
もく　森田　藤谷
游水　荒川　空華
前衛
蓮紅　浅野　彩紅
〃　大友　紅蓉
四谷　鈴木　白鷺
〃　木原　尚子
（臨書）
漢字
竜泉　小林　洋龍
かな
うる　木村　順子

漢字研究部
（蘭亭叙）

選評　小伏小扇

今月のホープ作品



奥田嵩柏

漢字研究部　特選　奥田　嵩柏

奥田嵩柏さんの臨書作品は気宇が極めて大きく蘭亭叙の心を取って筆は清純に働き、特に「蹔」や「己」は心と筆が一体となって動いています。原帖は張金界奴本と思われますが、神龍半印本に近く快作です。

◎漢字研究部総評

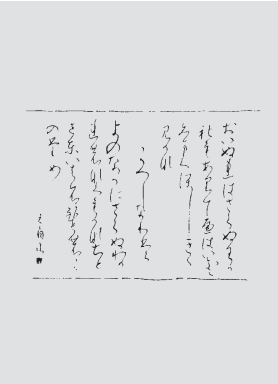
全体を通して言えることは、書き込みが足りないということです。蘭亭叙にはいろいろの種類のものがありますが、いずれも当時の名人、達人が搨書したり、臨模したりして現存しています。いずれも渾身の力を傾けて達成出来たものです。これを機によい法帖を選んで各種蘭亭叙を臨書してみてはいかがでしょう。八面出鋒の用筆で気骨をもって書けば気韻生動したもので、剛勁な臨書画出来ると思います。

琴初晴多博直　白翠香桃爽珠　靖喜美子毅　峰子香　由佑香月　虚桜芳紫幸永
燁江子佳峰浩　涛光舟華陽光　枝翠子篁　拙江

かな研究部
（曼殊院本古今集）

選評　山藤　美知子

今月のホープ作品

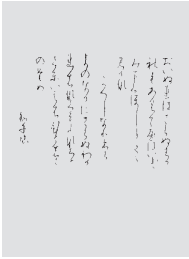


秋山之扇

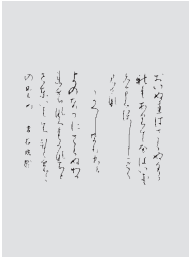
この古筆の単純な形、明快な線を大らかに正確に表現し、墨量、墨色共に最適で、大変よく書かれた秀作です。

◎かな研究部総評

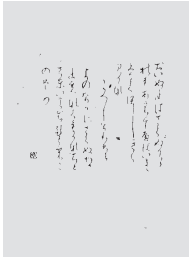
誤字「ゑ」「を」に見うけられ残念な作多く、よみに留意して正確に書くことを、調べて書くことを習慣にしてください。墨量の多いのが目立ちました。



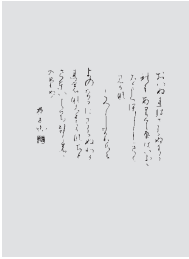
清洋知
耀子子



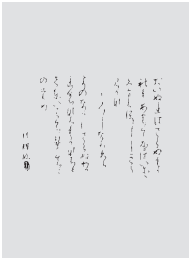
冬紅愛
華霞石

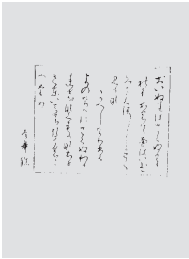


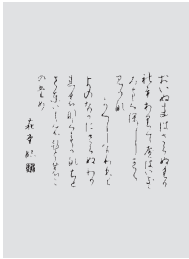
萩一初
堂栄江

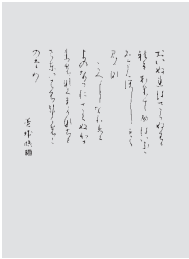


蘆山哲
城房子









かな研究部成績表

特選

かな研究部　特選　秋山　之扇

麗澤　道明　秀大　石玉　た樹　や右　若如　渡京　正A　紅う　竜た　紅明　正も　仙も
澪彩　Ⅰ華　会汀　書雲　陵瑤　泉布　吉龍　瑤華　緑漢　松か　南華　峰泉　吟葉　汀松　扇春　春
宇井　伊藤　石橋　新井　熱海　青木　後藤　吉田　斉藤　高木　岩田　高橋　飯高　鈴木　藤村　堀川　大沢　金子　工藤　田玉　村田　遊佐　高橋　猿本　橋丸　礎貝　岩崎　松井　秋山
楠麗　敏子　寿子　知子　藤雪　桃翠　啓子　良泉　鶴子　絹子　合燈　春泉　雅生　幹広　智子　昌春　輝子　魯　淳　蘆城　山房　哲子　萩堂　一栄　初江　冬華　紅霞　愛石　清耀　洋子　知子　之扇

秀作（60音順）

こだ　京橋　千葉　正華　泉会　春汀　洞書　高陵　遊雲　小汀　正華　桂泉　一草　調布　倉吉　江龍　紅瑤　顧華　明緑　玉漢　た松　湘か　正南　英華　竜峰　翠泉　千吟　彩葉　春汀　玉松　竹扇　澄春
吉野　吉田　松重　松岡　北條　藤井　濱田　丹羽　西澤　永瀬　永井　中村　中川　中江　中田　鶴み　須恵　神保　志水　嶋由　塩澤　猿与　佐藤　佐起　佐祢　後美　近知　河閑　岸恵　野田　沖佐　小和　岡子　字田
彩祥　佑子　翠景　律子　靖子　晴雪　竹子　恵子　彩峰　蓉汀　宏枝　笙泉　一澄琴　よ恵　恵子　香子　佳子　舟子　子子　詠紅　麻右　美子　美香　笠子　知子　閑恵　恵子　子子　浜香　芦扇　春華

入選（60音順）

生大　竜泉　高陵　竹美　竹扇　や　佐ま　玄倉　象　〃　〃　澄春　千葉　青青　さ陸　北雲　遊歌　秀つ　遊雲　竜泉　卯月　有秋　渡辺　治田　〃　〃　千葉　英峰　樹原　高崎　調布　東小　東光　鬼高　広島　竹扇　竹田　広島　誉田　伏華　高陵　高真　石習　石春　澄真　高葉　千雲　遊だ　こ葉　千崎　高陵　高崎　会陵
新井　浅川　米田　横山村　山口　山口　守屋　宮内　増田　深堀　平山　林　浜田　西岡　西江　長島　中永　徳谷　土田　津田　武山　馬口　渋本　紫谷　澤雲　斉田　紺藤　小野　小峰　小林　神藤　川野　川田　本岡　河藤　加川　香野　小田　小瀬　小上　大野　梅山　内田　岩瀬　岩上　今関　池田　五十　足立　青立　会木　木江
廣子　みな江　和舟　蘭子　炎舟　律秀　順子　幸毅　幸平　華秀　清洗　彩華　雙鶴　よ子　悦子　美香　一水　豊作　溪仙　つ江　幸子　煌枝　みふ子　麻子　愛華　雙月　早鶴　遊苗　加子　雅子　さゐ　祥峰　典子　紫仙　星扇　龍恵　冨子　理絵　代子　輝峯　礼子　久泉　皓子　祥園　郁子　梨霞　尚古　佳栄　万琇　理子　勇介

昌苑　石習　硯水　春汀　N日　高崎　や橋　京陽　蒼美　若Ⅰ　A南　湘桜　〃　大雲　竜曜　若泉　広美　詢島　昌扇　う苑　生大　四谷　幕張　生大　誠谷　艸阪　大峰　英雲　大波　安扇　詢峰　青泉　書明　秀葉　千　こだ　A Ⅰ　前橋　誠和　艸玄　竜泉　誉田　T葉　書陵　筑習　誠H　筑泉　誠桜　華和　生祥　春大　大汀　千阪　卯葉　月
佐藤　佐藤　佐々　佐木　坂本　酒井　齋藤　近藤　小山　小林　小林　小嶋　高美　黒武　黒柳　呉　倉八　熊谷　工藤　木村　木井　君島　木原　北村　北又　亀井　金沢　片山　梶野　小寺　小川　尾野　岡部　大川　大森　大槻　梅原　生由　碓井　鵜澤　植木　今村　今井　猪又　井上　犬飼　伊藤　伊藤　伊藤　板垣　石ひ　石橋　生駒　飯田　新谷
初香　佳代　木子　雅芳　和子　み子　恵よ　か子　松え　恵春　洋子　由子　路希　智子　久竹　幸城　豊葉　千穂　紫代　桃蘭　順蘭　春苑　尚子　惠翠　春舟　紫峡　萩風　美代　紘苑　久美　洽詢　照晨　喜芳　幸代　星江　虹祥　美祥　琴子　如弘　貴舟　む風　理泉　静っ　道扇　良香　則石　悦佑　順子　青子　さ鳳　喜子　萩花　嵐彩　光泉

選外168名氏名略　ふみ　千葉　華祥　澄春　五葉　も　紅苑　英峰　ち葉　艸玄　〃　硯水　もこくだ　皆映　幕張　蓮紅　大雲　大曜　咲舟　高陵　秀水　鉈子　土気　や　東ま　高向　埜崎　遊和　艸雲　秀玄　五水　春葉　玉汀　森葉　大地　翠雲　華柳　玉祥　青松　五峰　幕葉　幸張　高扇　彩陵　竜泉　山王　英峰　大阪　誠和　樹原　A Ⅰ　八雲　皓映
吉田　湯本　山崎　柳堀　森田　森木　茂山　村田　村田　村田　宮野　宮澤　丸山　松本　松延　松島　松田　堀切　堀江　藤本　藤川　藤和　深島　平澤　平山　皇田　根本　根岸　長井　中澤　富理　都澤　渡丸　遠ど　東子　積紀　近希　玉絹　田平　池雅　田柳　高恵　高耶　高千　高橋　高橋　高橋　高野　関口　鈴木　鈴木　鈴木　新野　庄谷　志司　柴村　七田　重條　信
富士　禮子　桜江　政翠　睦子　藤谷　真蘭　龍峰　笑華　珠風　草枝　礼秋　藤華　里倖　映絵　翠華　美舟　幸雪　幸泉　松啓　寿三　歌子　佳月　優子　美和　芝香　雅子　裕子　久仙　雅子　惠子　り　紀子　希子　絹子　雅雲　柳芳　恵葉　耶衣　千代　正子　賢雲　汐風　章治　秋麗　利子　春江　多美　萩碧　翠光　咏艸　抱舟　和良　裕美　裕映